

水田農業経営確立対策の計画的な推進を図ろう。
直播栽培等新技術の導入と地域特性を活かした米づくりを進めよう！

あ、おいしい。

平成 12 年度

ロゴ貼り付け

稲作情報

中通り版
第 1 号

平成 12 年 4 月 13 日

「ふくしま新世紀農業・農村確立運動」県推進本部

発行：福島県の米 稲作情報編集会議
編集：福島県農業試験場

1 カ月予報概要（4 月 7 日仙台管区気象台発表）

この期間は、低気圧と高気圧が交互に通る、天気は周期的に変化するでしょう。低気圧の通過後は一時寒気が入る見込みです。また、上空に寒気を伴った低気圧の影響で天気がぐずつき気温の低い時期があるでしょう。降雹や降霜のおそれもあります。この期間の平均気温は平年並か低いでしょう。

健苗の適期移植と適切な水管理で初期生育を確保しよう。

移植栽培の技術ポイント

- (1) 基肥は、気象変動に対応できるように、品種に合わせた量を施用し、極端な多肥は行わない（表 1）。
- (2) 玄米品質・食味向上のため堆肥の施用と耕深(15cm以上)を確保し、根張りを良くする。
- (3) 育苗管理は温度と灌水管理に注意を払い、徒長を防止して健苗を育成する。
- (4) 適期移植と適正な栽植密度および水管理で初期茎数の早期確保に努める（表 1）。

低温、強風条件下での移植は、活着不良や初期生育障害を引き起こすので避ける。

分けつの発生を促すため、活着後は 2 ～ 3 cm の浅水管理とするが、低温や強風の日は深水にして稲体を保護する。

- (5) 葉いもちの伝染源となる取り置き苗は、活着後直ちに処分する。
- (6) 除草剤は雑草の発生状況に応じて使用する。代かきから田植えまでの期間が長い場合は、初期剤または一発処理剤と中期剤の体系処理を行う。

除草剤散布後 4 ～ 5 日間は湛水状態を維持し、散布直後の落水やかけ流しは絶対に行わない。

表土剥離には A C N、ジメタメトリンを含む除草剤が有効である。

前年にアゼナ類の残草が目立ったほ場では、プレチラクロール、ピフェノックス、カフェンストロールを含む一発処理剤や初期剤と中期剤との体系が有効である（防除基準参照）。

技術ポイントの基礎データ等

表 1 地域別品種別の基肥窒素施肥量と栽植密度

地 域	品 種	基肥量 (kg/10a)	栽植密度 (株/㎡)
中通り北 部平坦	ひとめぼれ	5	20～22
	コシヒカリ	3～4	20～22
中通り南 部平坦	ひとめぼれ	5	22
	まなむすめ	6	22
	コシヒカリ	3～4	21～22
山間	まいひめ	8	24～27
山沿い	あきたこまち	6	22～25
	じょうでき	6	22～25

育苗箱施用によるいもち病・初期害虫 同時防除のポイント

規定薬量を守り、育苗箱に均一に散布する。
防除効果を高めるため、地域で組織的に取り組む
体制を作る。

残効が長いいもち病防除剤を施用した場合でも、
穂いもちに対する防除は必須である。

< 体系の例 >

育苗箱施用 ——— 穂いもち対象
粒剤施用（出穂15日前）
散布剤施用（穂ばらみ期、
穂揃い期の 2 回）

直播栽培の技術ポイント

直播栽培実施ほ場は、鳥害を回避するためにできるだけ団地化をはかる。均一な出芽・苗立ちを確保するために、ほ場の均平化に努める。

A 湛水直播

(1) ほ場の準備

ほ場は耕起前にできるだけ均平化しておき、代かきは練りすぎないようにする。播種時の表土の硬さは、播種方法によって異なるので、代かきから播種までの日数や落水の時期によって調節する。

ほ場内の土壌硬度を均一にするために、排水路を形成して滞水部分ができないようにする。

(2)播種

出芽、生育促進のためにカルパー粉衣後播種前に加温処理を実施する(図1)。加温方法は、25℃2昼夜または32℃1昼夜であるが、この間粉衣種子を乾燥させないように注意する。

(3)播種後の水管理

覆土をしない播種機を用いた場合や強い雨が予想される場合を除き、播種後は土壌の還元を防ぐため、出芽始めまで落水状態を保つ。

播種前に排水路などを設置しなかった場合は、灌・排水管理を容易にするために、ほ場内に10m間隔程度に作溝を実施する。

(4)除草剤散布

除草剤散布は散布時期が遅れるとノビエに対する効果が劣るので、ノビエの生育を観察して遅れないように注意する。表層剥離が発生した場合は、イネ3葉期以降にACN粒剤を散布する。

B 乾田直播

(1)ほ場の準備

事前に圃場の均平化を図るとともに、湛水時の漏水を防止するために畦畔を整備しておく。

耕起から播種・土壌処理剤散布までが1日で完結できるように作業体系を組み、耕起は碎土率70%以上を得るためにほ場が十分乾燥した時に行う。

播種後の湿害を防止すると同時に、乾燥時の灌水を容易にするため、ほ場内に10m間隔で深さ10～15cm程度の明きよを掘る。

(2)播種

事前に播種量に合わせて機械の繰り出し量を確認するとともに、播種深を2～3cmに調節する。

(3)除草剤散布

茎葉処理剤は、ノビエの葉齢が大きくなると効果が劣るので、遅れないように散布する。また、ノビエの葉齢は播種後の積算気温で推定が可能である(図2)。

直播栽培の技術ポイントの基礎データ等

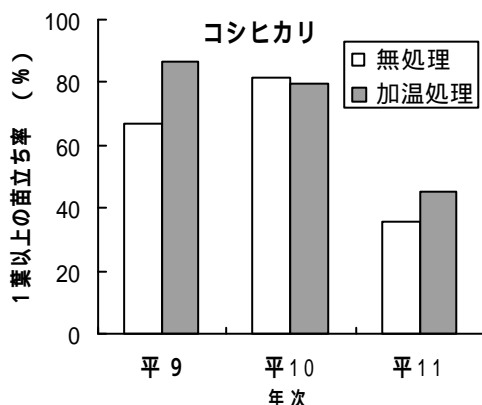


図1 播種後20日における1葉以上の苗立ち率 (会津支場)

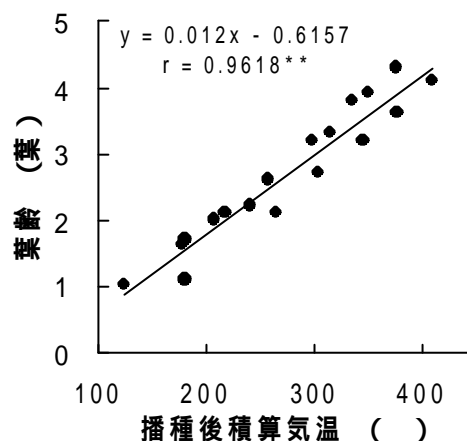


図2 播種後積算気温とノビエの葉齢 (福島農試 1998)

麦・大豆栽培の技術ポイント

(1)麦類

生育は順調で、出穂期は平年並からやや早まる見込みである。

小麦の収量・品質向上のために、生育に応じて出穂期の追肥を行う。施肥量は、窒素で1～2kg/10aとする。

梅雨期に向けて排水路の整備を行う。

うどんこ病および赤かび病等の防除は計画的に行う。

(2)大豆の作付準備

表2を参考に、播種期に応じて適正な栽植本数を確保する。

生育初期の湿害対策のため、特に水田作では十分な排水対策をとる。

表2 大豆の播種量・施肥量の目安

播 種 時 期	畦間 (cm)	株間 (cm)	栽植本数 (100本/10a)	基肥窒素量 (kg/10a)
標 播(6月上旬)	70～75	20～30	130～140	2.0～2.5
晩 播(6月中旬)	70～75	14～15	190～210	2.5～3.0
極晩播(6月下旬)	70～75	9～10	260～290	2.5～3.0
晩播狭畦無培土	30～40	20～25	200～330	2.0～2.5

